

オーガスト
オフィシャルハンドブック
2014年夏号

大図書館の羊飼
Dreaming Sheep
a good librarian like a good shepherd after and another stories

includes
オーガスト最新作情報

 **AUGUST**

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。何回目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

当小冊子は、8月16～18日に秋葉原で開催する「AUGUST Summer Vacation in AKIHABARA」というイベントで初配布予定です。独力でこういったイベントを開催するのは初めてですが、皆様にお楽しみいただけるよう準備して参りますので、沢山のご来場をお待ちしております。

またご存知の方もいらっしゃると思いますが、先日、雑誌にて完全新作『千の刃濤、桃花染の皇姫（せんのはとう、つきそめのこうき）』の制作を発表いたしました。当冊子にも情報を載せておりますので、今後のリリースにもご注目いただければ幸いです。今度の新作は、多少「和」のテイストが入った世界観となる予定です。これまでのオーガストには無かった新しいテイストに、ぜひご期待くださいませ。

また、『大図書館の羊飼』のアニメが、10月より放送されることとなりました。私たちが、原作という立場から脚本やキャラクターデザイン等の監修をさせていただいておりますが、現場の士気も高く良い作品になりそうです。こちらも放映をどうぞ楽しみにお待ちしております。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2014年夏 オーガスト/ARIA 拜

CONTENTS

- 3 …… オーガスト最新作情報
千の刃濤、桃花染の皇姫
- 8 …… 『大図書館の羊飼』Short Story
「七人目の図書部員」
- 14 …… スタッフ対談
- 15 …… あとがき



安寧の日々は灰燼に帰した——

黎明から二千年、一系の皇帝により統治されてきた皇国は夷狄の手に落ちた。

当たり前だったものが、次々と崩れていく毎日。

時代の奔流に弄ばれながらも、人々は遅く未来を探し続ける。

たった一人残された帝位継承者《宮国朱璃》は力を求めている。

仇敵を排除し、この国を取り戻さなくてはならない。

過去を失った武人《鶴田宗仁》は主を求めている。

鍛え上げられた白刃は、忠義のために振るわれねばならない。

その日、

運命に導かれ、二人は出会う。

往く先にあるのは失意か祝福か、答えを知る者はどこにもいない。

オーガスト最新作

『千の刃濤、桃花染の皇姫』

シナリオ：榊原拓、内田ヒロユキ、安西英明 / 原画：べっかんこう、夏野イオ

WindowsXP/Vista/7/8

みやぐにあかり

宮国朱璃

先代皇帝の一人娘であり、最後に残された正統なる帝位継承者です。敗戦時の混乱のさなか、父親である皇帝は崩御するものの、彼女は辛うじて敵国の手を逃れました。その陰には、主人公・宗仁の獅子奮迅の働きがあったと言われています。戦後は身を守るため正体を隠し、王家を再興すべく臥薪嘗胆の日々を送ってきました。宗仁が通う学園に転校してきたことにも、何か目的があるようです。

生まれながらの高貴さを持ちながらも感情表現は豊か。上品かつ屈託のない笑顔には誰もが心を奪われます。嬉しくても悲しくても泣いてしまうタイプで、周囲にからかわれないよう必死に涙をこらえていることも。



”ひすいてい” ときた かなみ

“翡翠帝” 鴉田奏海

戦後すぐに即位した皇国の皇帝、通称《翡翠帝》。国民に絶大な人気を誇り、可憐な姿と涼やかな声は敗戦で傷ついた国民の心を癒やしてきました。一般には先代皇帝の娘だと信じられていますが、実際には王家と血の繋がりはなく、正体は宗仁の義妹です。しかし、彼女の素性は最高機密とされ、兄妹ともに互いが生存していることすら知りません。どのような事情で彼女は皇帝に即位したのでしょうか。

性格はかなり控えめ。男性の数歩後ろを静かについていくような奥ゆかしさがあります。



しいのはことね

椎葉古杜音

二千年前から王家に仕えてきた巫女一族の末裔です。幼少の頃から厳しい修行を積み、現在は与えられたお役目に身を捧げています。彼女の行動を見るに誰か探している人物がいるようです。

明るく奔放な性格でポジティブ思考、いつも周囲を明るくしてくれます。本人は大人だと言い張っていますが、好物を前になると自然に表情が緩んでしまったりと、まだまだ可愛らしいところもあります。趣味は宗任のお世話。お弁当を食べさせないと自分が体調を崩すとか。



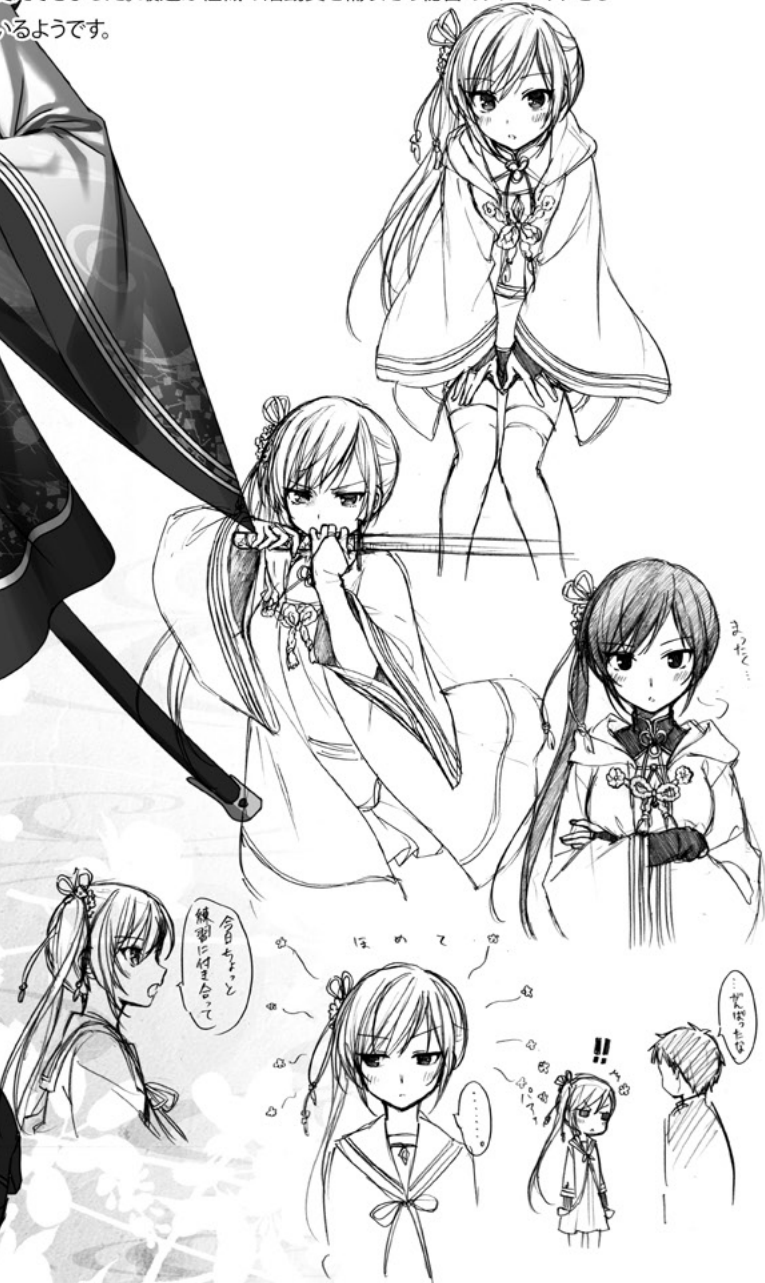
※画像およびテキストはすべて開発中のものです。今後設定やデザインを変更する可能性があります。

いのう ほとり

稲生 許

代々続く武人の家に生まれ、宗仁とは幼馴染。同じ剣術道場で共に汗を流していました。戦争では明義隊の隊長として奮闘するも、部隊は壊滅。奇跡的に一命は取り留めたものの、多くの仲間を失いました。現在は武人階級をまとめ上げ、母国の独立のために活動しています。

多人数でいる時はクールで口数が少ないにもかかわらず、宗仁と二人きりになると一生懸命にしゃべります。記憶を失った彼の身を案じ、一番近くで支えてきました。最近は組織の活動費を補うため秘密のアリバイトをしているようです。



エルザ ・ヴァレンタイン

学園の生徒会長を務めると同時に、共和国政府のスタッフとしても働いています。敵国のトップの娘であることは広く知られ、その言動はいつも注目的。皇帝や武人といった特権的身分制度を解体し、平等な世界を作ろうと考えています。

人柄は穏やかで誰からも慕われる温和な雰囲気を持っています。しかし、皇国人に対しては異国の言葉できつい発言をしてしまうこともあります。皇国の文化は嫌いだと言い張りつつも、お風呂だけは例外のようです。



七人目の図書部員

安西秀明

「新入部員の望月です。よろしくお願ひします」

真帆が恭しく挨拶をする。続いて、部員たちによる歓迎の拍手が起こった。

いつもの放課後、図書部の部室。

図書部に新たな部員が加わることになった。

「よろしくね、望月さん」

白崎が真帆に手を差し出す。

「ええ、こちらこそ」

二人はがっちり握手をした。

とびきり有能な新入部員を、みんな歓迎している。もちろん俺もその中の一人だ。

元生徒会長がなぜ、ここで入部の挨拶をしているのか。俺は昨晚のことを思い出す。

★

真帆の卒業式まで、残り三日となったその日。放課後、真帆が俺の部屋で晩御飯を振舞ってくれた。

今は食後のコーヒーを飲みながら、ゆっくりとした時間を過ごしている。

「真帆は本当に料理が上手くなったな」

「京太郎の舌が、私の料理に慣れただけだったりして」

「それはそれで嬉しいけど」

「ふふ、私も」

俺たちはベッドにもたれ、肩を寄せ合いながら座っていた。

「向こうに行ったら、もっと色んな料理を勉強しておくわ」

「ああ、楽しみにしてる」

そう言っただけで湯気の上がるコーヒーを啜る。

「こうやってゆっくりできるのも、あと少しね」

「卒業式の日にはバタバタしてるんだっけ？」

「ええ。入学は先だけど、早く向こうに行かなくてはいけないの」

真帆はため息を吐く。

「最後の日くらい、京太郎とゆっくり学園を歩きたいわ」

「まあ、仕方ないさ」

留学のことは、お互い前向きに考えられるようになった。

しかし卒業式は、真帆にとって学園との別れでもある。

生徒会長を務めた真帆には、より感慨深いものがあるのだろう。

「なあ、真帆」

「どうしたの？」

「何か、やり残したことってないか？」

自然な口調を装って言った。

卒業式が近付いてくると真帆は時折、寂しげな顔をするようになった。

もちろん学園を卒業する悲しみはあるだろう。しかし生徒会長として、何かやり残したことがあるのかも知れない。

一度そのことが気になってしまうと頭から離れず、こうして直接聞いている。



「やり残したこと？」
真帆が首を傾げる。

「特にはないと思うけれど……」

「生徒会のことでも、もっと個人的なことでも、何でもいい」

「うーん」

真帆は顎に手を当てて考え込む。

「ああ、そうだ。私、図書部に入ってみたいの」

「ん？」

思わず聞き返してしまった。

「一日だけでいいわ。私を図書部の部員にしてほしいの」

聞き間違いではなかったらしい。

「ふざけているわけじゃないのよ。元生徒会長として、学園を盛り上げてくれた部活を体験してみたいの」

俺の顔が相当なものになっていたらしく、真帆は慌てて弁明した。

「あとは、京太郎との思い出作りのためかしら」

そして笑顔で付け足した。

「そっちが本音か？」

「どっちも本音よ」

しばらく待ってみたが、冗談だと言出ししそな気配は無かった。

「じゃあ、白崎に確認してみる」

★

というような事があり、今に至る。

昨晩の出来事を反芻しているうちに、拍手は鳴り止んでいた。

高峰と一年生コンビは依頼があるため、早々に

に部屋を出て行っている。

「それでは、早速依頼に取り組んでもらいたいのだが」

桜庭がパソコンを操作すると、様々な依頼が画面に羅列された。

「何か、希望はあるか？」

「ええ、生徒会長だった私が、絶対にやらないうような仕事をやってみたいわ」

「ほう。なら、少し待っていてくれ」

桜庭が妖しく笑い、再びパソコンを操作し始める。

「一体、どんな依頼を任せられるのかしら」
真帆の声は弾んでいる。

「ずっと生徒会長として指示する側だったから、こっちの立場が楽しいのかもしれない」

「余計なこと言っちゃったせいで、変な依頼を任せられるかもしれないぞ」

「あら、楽しみだわ」

今は何を言っても無駄だろう。まさか本当に変な依頼を任せられることは無いと思うが。

「よし、これでどうぞ」

桜庭が言うと、部員全員と真帆がパソコンの画面を覗き込む。

「ピラ配り」

真帆が画面に書いてある文字を読んだ。運動部主催のイベント告知のピラらしい。

「ピラ配りといえば、図書部の得意技の一つだ」

「元生徒会長がピラを配れば、いい宣伝になるだろうな」

「確かに、面白そうね」

俺の意見に同意する真帆。

「ぜひ、やらせて頂戴」

やる気満々のようだ。

ピラ配り程度なら、特に困るようなこともな

いだろう。

……いや待て。

図書部のピラ配りはけっこう特殊だ。

「それじゃあ白崎、あれを用意してくれ」
「うん、ちよっと待ってて」

桜庭に指示され、テキパキと動く白崎。

「京太郎、『あれ』って何かしら？」

「『あれ』の中でも『どれ』かが問題だ」

「？」

「うん、これなら望月さんでも着られるよね」
こちらを向き直った白崎の手には、巫女服が広げられていた。

「し、白崎さん、それは何？」

「私と望月さんなら、大体サイズは一緒だから大丈夫ですよ」

「いえ、サイズがどうということではなくて真帆が困ったように俺と桜庭を交互に見る」

「真帆、図書部のピラ配りって覚えてるか？」

「ええ、勿論覚えてるけれど」
完全に戸惑っている真帆。

「わ、私もコスプレをするの？」

「元生徒会長といえど、図書部に入ったからにはそれが義務だ」

桜庭が扇子でパソコンの画面を指しながら言った。

「とんでもない部活だ」

「まあ、やってみればいいんじゃないか」

「で、でも」

真帆は躊躇している。

コスプレピラ配りは図書部が学園を盛り上げた活動の一つだ。

真帆もそれを理解しているからこそ、断りきれず躊躇しているのだろう。

「図書部を体験したいなら、やっておくべき

「俺としては、躊躇するぐらいならやってほしい。」

真帆に悔いを残さずに卒業してもらおうのが、俺の目標だ。

「それに、似合うと思う」

真帆には、俺との思い出作りという目的もあるのだ。コスプレでもすれば、いい思い出もなるだろう。

「そう言えば着ると思った？」

真帆が顔をしかめた。

しかし頬は少しだけ赤くなっている。

「そうね、でも」

真帆は白崎の持つ巫女服を、じっと見つめた。

「これくらいなら、着てみようかしら」

ようやく真帆の決意が固まったらしい。

白崎と桜庭が俺にジト目を向けている。

「寛のやつ、これを見せ付けるのが目的だったのか」

「部内恋愛禁止の義務も作ったほうがいいか」

ヒソヒソと何か話しているが、気にしないことにする。

「ふふ。似合ってるかしら？」

巫女服を着た真帆が、その場で一回転する。

髪の毛と巫女服の袖が、ふわりと舞った。

「ああ、似合ってる」

背景に神社でもあれば完璧だろう。

「やっぱり、みんな見てるな」

「こんな反応をされるなんて、新鮮ね」

通りがかる生徒誰もが、真帆を見て驚いている。

俺たちはピラを配るために、生徒の人通りが多い場所へ移動していた。ちなみに俺は真帆のサポート役ということで、特にコスプレは

していない。

「何だか、生徒会長をやっている時よりも注目されているわ」

「元生徒会長が巫女服着てピラを配ってれば、誰でも驚くだろうな」

「いい宣伝になるわね」

真帆は最初こそ恥ずかしさが残っていたが、今は楽しんでるようだ。

「ほら、人が来たぞ」

「あら、本当」

数人の生徒たちが談笑しながら歩いてくる。

真帆には気付いていないようだ。

「よろしくお願いします」

生徒たちの横合いから、真帆がピラを差し出す。そして巫女服を着た真帆に気付いて、ギョツとした顔になった。

「ぜひ、参加してくださいね」

何が起こっているのかわからない、といった顔で頷く生徒。

そのまま真帆の姿をチラチラ窺いながら歩いていった。

「あの子たち、驚き過ぎじゃないかしら」

真帆が頬を膨らませる。

「それぐらい意外だったんだ」

「私って、そこまでお堅いイメージなの？」

「俺とか図書館部の連中は別だけど、一般の生徒からしたら大体そうだと思う」

「心外って程ではないけれど、少し寂しいわね」

「真帆個人ってよりは、生徒会へのイメージな気がするけど」

「……」

何か考え込んでいる様子。真帆。

巫女服を着ているせいか、仕草がいちいち厳



かに見える。

「真帆、人が来た。笑顔笑顔」

真帆ははっとして、すぐに笑顔になる。

「とにかく、ピラを全部配ってしまいましょうか」

「その意気だ」

★

それから真帆は積極的にピラを配り、その度に生徒を驚かせた。

ピラ配りを終えた俺たちはゴミ拾いを行っている。

「案外、たくさん落ちているのね」

制服姿に戻った真帆が、ゴミを拾いながら呟く。

「生徒も多いから仕方ないさ」

ゴミ拾いは依頼ではなく、図書館が自主的に行う活動の一つである。真帆がぜひ体験したいと言いつ出したのだ。

沈みかける夕日に赤く照らされながら、二人でゴミを拾う。

「それ」

真帆が落ちていた空き缶をこちらに投げた。

「よっ」

それをゴミ袋でキャッチ。

ゴミ袋が一杯になりかけたとき、数人の生徒が近くを通りがかった。彼らはゴミ拾いをする真帆を訝しげに眺めていく。

その視線を受けて、真帆は苦笑した。

「元生徒会長がゴミを拾って驚かれるなんて、おかしいわね」

「それ以上のことを、真帆は沢山やってきただろ」

真帆は間違いなく、学園のためになることを行ってきた。

「以上も以下も無いわ」

「じゃあ、沢山やってきた。それで十分だ」

「……ありがとう、京太郎」

真帆が優しく微笑みながら、学園を見渡した。

「そうね、沢山、やってきたものね……」

呟くように言って、真帆は何も喋らなくなった。俺も無言になり、沈黙が下りる。

しばらくの間、夕日に染まる学園を眺めていた。すると突然、真帆の鳴咽が耳に届いた。

「うっ……ひくっ……」

「真帆？」

真帆は瞳から涙を流している。

慌てながら手で拭うが、溢れる涙は止まりそうにない。

「ごっ、ごめんなさい……色々と……ひくっ、思い出して、しまっ」

「思い出した？」

「初めて学園に来た日や……生徒会長に選ばれた日のことを」

ああ、そうか。

真帆は、ただ卒業することが悲しくて泣いているのだ。

「ご、ごめんなさい……っ」

「なんで謝るんだよ」

「だって……泣いてしまったら、京太郎を心配させてしまうから」

「そんなこと気にしなくても大丈夫だ」

「だって私たちは、一年間も離れ離れになるのに……」

「留学のことは、もう前向きに考えるって決めただろ」

「三年間通った学園を卒業するんだ。誰でも泣きたくなる」

ましてや生徒会長を務めたのだ。他の生徒よりも遥かに濃厚な学園生活を、真帆は送ってきたはずだ。

「だから、泣いてもいい。今だけは心配しないからさ」

俺がそう言うと、真帆はまた大粒の涙をこぼし始めた。

★

真帆が泣き止むと、俺たちはゴミ袋を片付けて部室へ向かった。

「目、腫れてないかしら？」

「そこに突っ込むほど野暮な連中じゃないさ」後で俺が追及されるだろうけど。

部室にたどり着き、扉を開く。

「生徒会長、お疲れ様でした！」

部室の扉を開けると、部員たちの労いの言葉に迎えられる。無論、俺ではなく真帆に対しての。

「え？ え？」

真帆は戸惑いながら部員たちの顔を見渡している。

「きよ、京太郎、これは」

「望月さん、お疲れ様でした」

白崎が真帆に花束を手渡した。

「あ、ありがとう」

「あ、これら全部」

「望月さん、今まで学園のために色んなことをしてくれたから」

「生徒会役員に感謝する生徒はいても、会長

個人に礼を言う生徒は少ないだろう」
白崎の言葉に桜庭が付け足した。

「だから私たちで、『卒業おめでとう』よりも『生徒会長お疲れ様です』って言ってあげようと思っただけです」

白崎が言い切る。

「……って、寛くんが昨日メールで皆に、そう提案したんです」

余計なことまで言いやがった。

昨夜、白崎に電話をした後のことだ。メールで皆に真帆へのサプライズを提案し、全員が快く承諾してくれた。

「そうだったの、京太郎」

真帆はまた泣きそうになっている。

「まあ、これでスッキリと卒業できるだろうと思っただけ」

俺が言うのと、真帆はどこか申し訳なさそうな顔をした。

「ねえ、京太郎」

「ん？」

「私、もう一つだけ、やり残したことが見つかったの」

「マジか」

卒業式は明後日だ。

間に合うだろうか。

「大丈夫、一日あれば十分よ」

心配が伝わったらしく、すぐに補足される。

後で真帆から聞いた話は、確かに一日あれば何とかかなりそうだった。

★

翌日、卒業式まで残り一日となった放課後。真帆のやり残したことを、今まさに行っている。

「実現できて良かったわ」

真帆は満足そうだ。

目の前には、図書部と生徒会役員が一緒になってゴミを拾っている光景があった。

真帆は最後に、ゴミ拾いをして驚かれる生徒会役員のイメージを変えたいと考えたのだ。

自ら役員たちに掛け合い、この活動を実現させた。

「役員の人たちは、よく全員集まってくれたな」

「みんな積極的に参加してくれたのよ。特に葵が」

それは多分、真帆が言ったからだろう。口にはしないでおく。

「生徒会長でもない私の言うことを聞き入れてくれるなんて、いい後輩を持ったわ」

真帆は嬉しそうに言った。

もう大丈夫だろうけど、一応聞いておこう。

「やり残したことは、もう無いかな？」

「ええ、これで心置きなく卒業できるわ」

「明日が卒業式とは思えないほどに明るい表情だ。私や京太郎が卒業しても、この行事が続けばいいわね」

「さっさと続かさ」

そのきっかけを作るのが、俺たちだ。

「俺たちも行こう」

「ええ」

END



榊原拓 (以下「榊」) : さあ、対談の時間がやってまいりました!

べっかんこう (以下「べ」) : 今回はコミケじゃないんですね。

榊: 秋葉原で開催するイベント、AUGUST Summer Vacation in AKIHABARA での配布となる予定です。

べ: メイド喫茶の、JAM Akihabaraさんとコラボもあるんですね。まだ三週間ほどありますが、どんな風になっているか楽しみです。

榊: 僕もこういったイベントは初めてなので、どうなるか、蓋を開けてみないと分かりません。ドキドキです。

べ: 皆さんにも楽しんで頂けると良いですね。そして今回はなんと、ついに小冊子で新作の発表ですよ!

榊: 雑誌にもちらっと絵などは出していましたが、タイトルはこの小冊子が初になるはず。

べ: そのタイトルは……「千の刃濤、桃花染の皇姫 (せんのはとう、つきそめのこうぎ)」に決まりました!

榊: 長いですね。

べ: お前が言うな!(笑)

榊: 長いタイトルですが覚えていただけると嬉しいです。

べ: ちなみに、まだ社内にも略称はありません。

榊: 僕らで今考えちゃいませんか?

べ: なんかアイデアありますか?

榊: ……けっこう難しいね。

べ: って無いんかい! 略称は決まってないので、みんな好きに呼んでねってことでよろしくお願いします。

榊: さて、今回の冊子にはキャラ絵も載ってます。

べ: キャラクターは和服っぽいようなファンタジー衣装のようなそんな感じです。

榊: メインヒロインはお姫様なんですよ。

べ: お姫様ですねえ。僕らお姫様が好きなのかな。

榊: ま、まあ、嫌いじゃないかなと。

べ: あと今回は巫女さんもいますよー。

榊: 巫女さんは初めてかな? 和テイスト作品で満を持して登場、って感じですね。

べ: コスプレ的に巫女服を着せたりはしましたが、本格的なキャラは初めてかと。

榊: 夏野イオ君が描いたラフも沢山ありますね。

べ: キャラデザインは僕とイオ君と一緒にやりました。担当キャラは分かれていますけどデザインには二人のアイデアが盛り込まれています。

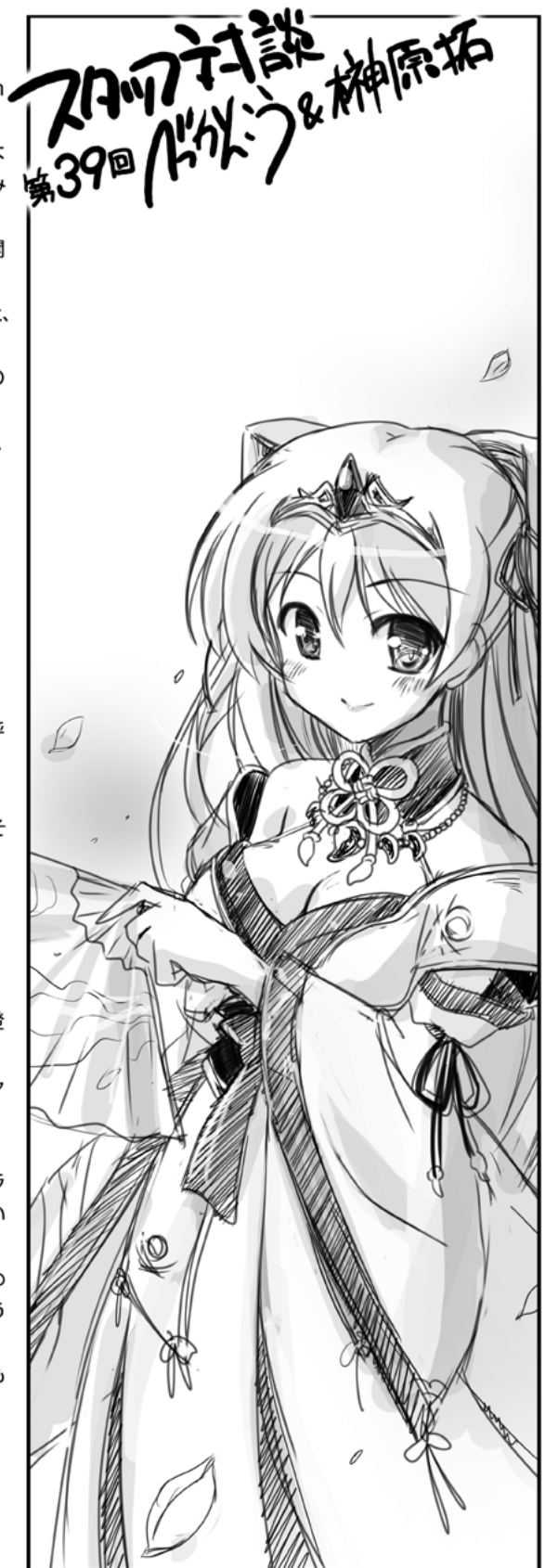
榊: ずっと原画は単独作業だったけど、今回は相談しながら進められてて、楽しそうっていうか行き詰まるのが少なくなったように見えます。

べ: いつもと違うやり方なので新鮮です。従来のファンの方にも満足していただきつつ、新しいテイストを感じていただければと。

榊: それはシナリオチームもです。お互い頑張りましょう!

べ: あと近日中に大ニュースが! こちらもお楽しみに!

2014.7.25 19:50 社内にて



POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在、開発室では新作「千の刃濤、桃花染の皇姫」の開発が進んでいます。
この時期はまだキャラクターも定まらず、原画にしろグラフィッカーにしろシナリオライターにしろ、手探りでキャラを描き出していくこととなります。

——どう笑うのか、どう泣くのか、どう悔しさをこらえるのか。

一つ一つを実際に描いていく中で、徐々にキャラクターが固まっていきます。そして、CGはシナリオに、シナリオはCGに、それぞれ影響を与え合います。予想以上に時間がかかってしまうこともありますが、開発の面白い時期の一つだと思っています。当冊子にもそれらの一部を掲載していますので、開発室の雰囲気を感じていただければ幸いです。

また作品の方向性として「和」のニュアンスがありますが、それ以外にも楽しい日常部分とピターな部分のメリハリをつけた作品にしていきたいと考えています。ぜひ、今後の続報にもご注目ください。

なお本作から、「放課後しっぽデイズ」で原画を務めた夏野イオが、べっかんこうとのW原画として加わります。二人で協力して原画を担当していきますので、こちらもどうぞよろしくお願い致します。

そして「大図書館の羊飼」について、近々また別の展開のご案内もできると思います。
こちらもご期待いただければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。

今後ともオーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2014年夏 オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
2014年夏号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!

オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>



大図書館の羊飼
Dreaming Sheep
a good librarian like a good shepherd of her and another stories

イオ



大図書館の羊飼!

Dreaming Sheep

a good shepherd like a good shepherd after and another starts

オーガストオフィシャルハンドブック
2014年夏号

